

の対流雲が成熟段階に達すると降水を伴った下降気流が発生し、雲低下では発散する寒気で占められるようになる。このことは地上の発散域が周辺より低温なことから支持される(第17図上段参照)。

また、この低温な発散風とその周辺の強風先端の暖湿気流とが収束を起して、新しい対流雲を発生させることが考えられる。このような対流性じょう乱域では、対流雲を発生させると同時に上層風に流される対流雲を増幅強化させて、バンド構造の降雨システムが維持されるものと理解できる。

ここで、対流性じょう乱を形成し維持させるものとしては、下層の水蒸気フラックス収束と中間規模の中層ジェットコアー近傍の運動場と気圧場との不つり合による鉛直循環との相互作用による。

## 6. あとがき

本調査は気象研究所との地方共同研究の一環によるもので、相原正彦気象大学校教授のご助力と二宮洸三博士

ならびに和田英夫博士のご指導に感謝します。なを、解析資料の提供に協力いただいた岐阜地方気象台、中部地方建設局管理河川課、愛知県土木部河川課ならびに県内各消防署に謝意を表します。

## 文 献

- 名古屋地方気象台, 1973: 昭和47年7月豪雨調査報告. 東海地方の部, 気象庁技術報告, **84**, 84-96.  
 武田喬男, 1973: 47・7 西三河東濃地方豪雨の雨量解析, 1973年度春季気象学講演予稿集.  
 Matsumoto, S., 1972: Unbalanced Low-Level Jet & Solenoidal Circulation Associated with Heavy Rainfalls, J. Meteor. Soc. Japan, **50**, 194-203.  
 Ninomiya, K., 1971: Mesoscale Modification of Synoptic Situations from Thunderstorms Development as Revealed by ATS-III & Aerological Data., J. Appl. Met., **10**, 1103-1121.  
 黒崎明夫, 1973: メソ降雨の解析と予想. 東管技術ニュース, **33**, 28-50.



関口 武著

## 風の塔——四季の科学随想——

時事通信社 1974, 290p. 900円

本最は昭和46年、東京新聞、中日新聞の文化欄に連載された「科学歳事記」を主体に、昭和47年月刊「人物評論」昭和48年月刊「日本と世界の旅」連載の「気象歳事記」を併せてとりまとめたものである。一項目がB6判1頁に収まるよう500～600字にまとめられた約270項目の短いエッセーが収録されている。

内容は四季の科学と自然・科学・人間の二つに大別さ

れている。前者は春夏秋冬に分けられて、啓蟄、水ぬるむなどの季語のほか、長崎の凧上げ、振袖火事など日本の気象風土記やウドの地下産地やココヤシなど産業気象、春の雪や海陸風など気候や気象現象など多彩な話題が盛り込まれている。後半は暮らしの中の科学、自然と科学者の眼、現代社会点描、学者の周辺の四つに分けられ、著者の眼を通して見た様々の話題が書かれていて楽しい。外国旅行の印象もあり、著者が大学で日頃感じていることもある。

全体を通して、著者の旺盛な知識欲と長年の多地域にわたる外国生活や旅行の体験がよくこなされて幅広い分野にわたる、あか抜けのした随想集となっていて気軽に読めるのがよい。仕事に疲れたときなどに開いた頁を読むと気分転換になり、またちょっとした知識が得られ一挙両得だろう。

(河村 武)